主日礼拝説教「お待たせしました」

日本基督教団石神井教会　2019年9月1日

【使徒書日課】ヤコブの手紙　1章19～27節

19わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。20人の怒りは神の義を実現しないからです。21だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。

22御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。23御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。24鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。25しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。

26自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。27みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です。

【福音書日課】ルカによる福音書　13章1～17節

1ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。2イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。3決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。4また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。5決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

6そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。7そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』8園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。9そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

10安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。11そこに、十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。12イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、13その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。14ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない。」15しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。16この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」17こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ。

もう縛られない

9 月を迎えて最初の日曜日、子どもたちのためのプログラム（こどもの教会＝教会学校）では、今年もこの日を「振起日」と呼んで特別な活動をいたしました。「振起日」には、夏休みで教会から足が遠ざかりがちであった子どもたちが集め直され、新しい思いを与えられて、これからの季節の歩みを共にしてもらいたいとの願いが込められてきました。教会学校にやって来る子どもが激減する中で「振起日」を忘れてしまった教会が少なくありませんが、わたしたちの教会が曲がりなりにも「振起日」を掲げられているのは幸いなことです。

ところで、わたしには一つの考えがあります。「振起日」を子どもたちのためだけでなく、教会全体のために位置づけ直したらどうか、と考えているのです。さまざまな理由で教会から足が遠のいている人たちが、思いを新たにして教会に再び集うことができるようになるためにできることを、考えたいのです。もちろん、教会から足が遠のく理由は、人それぞれです。世代によって、課題も違ってくるでしょう。そうだとしたら、教会は、子どもたちのために毎年決まって行っている「振起日」の行事だけでなく、いろいろな世代や課題の違いを踏まえた、いくつもの「振起日」を設けていく必要があるかもしれません。そうとなれば、多くの「振起日」を行うためには、牧師や役員会、特別な奉仕者にそれを任せておけばよいということにはならなくなります。皆さんが、その担い手になっていただく必要がある。究極的には、皆さん一人ひとりが、それぞれに心に留めてくださる「あの人」のための「振起日」を設けて、準備して、迎えていただく。そうなっていくことが目標なのではないかと思うのです。

もちろん、わたしたちは、そういうことを目標にして、単に教会に集まる人の数を増やすことだけを考えているわけではありません。わたしたちは、一人ひとりの魂の救われることを願っているのです。神の御前に清く汚れのない心で生きるようになることの幸いを、一人でも多くの人に知ってもらいたいのです。何よりも、その幸いをかつて知り、味わいながら、そこから離れ、忘れてしまっている人たちに、その幸いを思い出し、取り戻してもらいたいのです。

残念ながら、教会に通い、信仰を保って生きることを、不自由に思われている方も、世の中には少なくありません。そうだとしたら、わたしたち教会に集っている者の責任は重大です。わたしたちの姿を見て、そう思われているのだろうからです。実のところ、わたしたちは、不自由になるために信仰者として生きているわけではないはずです。むしろ、自由になるためにこそ、信仰者として生き続けることに留まっているのです。使徒書日課（ヤコブ 1 章）でも、福音書日課（ルカ 13 章）でも、何かに縛られていた者が解き放たれて自由になるということが、大切なこととして語られていました。

まずは、わたしたちがこのことを思い起こしたいのです。日曜日、それぞれの生活から解き放たれて、教会の営みへと集められてきたわたしたちは、知らず知らずのうちに縛られていたところから解き放たれ、自由にされるために、神の御前に共に立たせていただいているのです。

悔い改めなければ…

そのことを思い起こすためにこそ、わたしたちは、礼拝ごとにまず「罪の告白」ということをしています。

それは、わたしたちが一週の歩みの中で犯してきた罪、汚れた行いや悪い思いを自覚して、捨て去らせていただくことだと言ってもよいのかもしれません。確かに、わたしたちは、捨て去らなければいけないような思いや行いを積み上げてきたのです。せめて週ごとにそれを始末しなければ、わたしたちの心はどうしようもなくなってしまうでしょう。週に一度の「心の掃除」も必要なのです。けれども、そのような「掃除」を、わたしたちは、短い詩編を交互に唱える「罪の告白」をするだけで十分にできているのだろうかとも思います。それでは済まずに、「礼拝中はずっと、自分の罪と向き合い、あれこれと悔い改めている」という方もいらっしゃるのではないでしょうか。

そのような方は、正直だと思います。詩編を唱えるだけで罪の告白が済んでしまうとは思わずに、「週に一度、せめて日曜日朝の礼拝の一時間は…」とご自分の罪と向き合い、神の御前に懺悔し、少しでも心を清めて新しい一週の歩みを始めようと願って、このときを過ごされる。それはきっと、わたしたち誰にとっても必要な悔い改めの姿勢だと思います。福音書日課で主イエスは、「**あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる**」と繰り返されています。確かに、わたしたちには、真摯な悔い改めが必要です。

けれども、そうだとしても、わたしたちは、一歩立ち止まる必要があるでしょう。「それは本当に悔い改めになっているか」と問い直す必要はないか、と。

使徒書日課で、ヤコブは、「**だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい**」と勧めています。一般的な格言としても有効なようですが、ヤコブが言いたいのは、まず「神の御言葉を聞く」ことです。「御言葉を聞くのに早くありなさい」と言うのです。そして、それと同時に、「話すのに遅くありなさい」と言うのです。

「聞く」のは、「御言葉」を聞くのです。では、「話す」のは、何を話すのでしょうか。「言葉」を話すのです。それは、何よりも「わたしの言葉」なのではないでしょうか。聖書を開いて「御言葉」を読んでいても、わたしの頭の中には、「自分の言葉」が渦巻いていて、読んだ「御言葉」はいつのまにか「自分の言葉」に変換されています。説教者として立たせていただいている者でさえ、その「舌」で語るのは、「御言葉」そのままではなく、「自分の言葉」であることが、何と多いことかと思います。

ヤコブは、そのわたしたち自身の「言葉」を話すのに遅くありなさい、と勧めている。それは、「自分の言葉」というものが、「御言葉」を聞くことを遅め、阻害してしまうからではないでしょうか。「御言葉」が心に植え付けられ、そのとおり行う者になっていくことを、わたしたち自身の「言葉」が邪魔をしてしまっている、ということが起こっている、ということなのではないでしょうか。「舌を制すること」は、わたしたちには難しいことなのです。

三年でも、十八年でも。しかし今日こそ！

わたしは、「自分の言葉」が多すぎるという自覚があります。1時間半に満たない礼拝の中で、皆さんは、どれだけ牧師の言葉を聞かされていることかと思います。皆さんの顔を拝見しながら、もしかすると、すでにうんざりして、牧師の声は聞き流す術を身に着けてくださっているのではないかと想像することさえあります。そして、そのとき、皆さんの中には、牧師の言葉とは別の、「ご自分の言葉」が響き始めているのではないか、と。

それは、わたしたちの教会だけのことではないでしょう。多くの現代の教会が、そのことを問うているのです。そして、礼拝の中で沈黙のときを設けるべきだと、今、多くの教会が考え始めています。実際に、司式者も説教者も他の誰も、口を開かず、舌を動かさず、心の中で「自分の言葉」を語り始めることさえ止めて、ただ、神のお語りくださる「御言葉」を聞くことに徹するのです。そのような沈黙の中でしか、わたしたちは本当には神の「御言葉」を心に植え付け、その「御言葉」がわたしたち自身の血となり肉となり、思いとなり、行動となるようにまで、ならないのかもしれない、と。

主イエスが、神を御父とお呼びして親しくその御もとに立ち続けられたのは、何よりも、神の御言葉をひたすらお聞きになられるためであったでしょう。そのような者になるためにこそ、主イエスは、ご自身、御父の御言葉が心に植え付けられた者として生きるとはどういうことか、その御言葉が御声としてその心の中で響きはじめ、その体をさえ新しくし、神の御言葉の響きに他ならない「言葉」を舌が語り始めるようになるとは、どういうことか。主イエスは、弟子たちにお示しくださったのではなかったでしょうか。

そのような者として弟子たちが新しく変えられていくことを、主イエスは、彼らを傍らに伴われて、ひたすらお待ちくださったのです。それこそ御父なる神の御心で、ひたすら、ご自身の命が奪われることになるのも厭われずに、お待ちくださった。その思いを、主イエスは、今日の福音書日課でも、いちじくの木のたとえでお語りくださっています。わたしたちが本当の意味で悔い改めるようになり、沈黙して神の御言葉を聞く者として新しくされるのに、主は、三年でも四年でも、お待ちくださるのです。いいえ、もっとお待ちくださるはずです。そう、主イエスは、**十八年間も病の霊に取りつかれていた女**を、憐れんで、待ち続けてくださっていたのです。そのような者をも、お呼び寄せくださるのです。

いいえ、主イエスは、ただご自分がお待ちくださるだけではなく、わたしたちにも、そのように互いを待ち続けなさいと、お呼びかけなのです。その人の傍らに、あなたも立って、ただ沈黙して神の御言葉に聞く者とされる幸いを分かち合いなさい、とお命じなのです。そうです、わたしたちは、すでに主イエスにお呼び寄せいただいたときから、神の御言葉によって生きる「神の子」としての歩みを始めさせていただいているのです。主イエスが、その道筋を近くし、そのときを早めてくださったのです。それは、わたしたちのため。そして、あの人、この人のためなのです。